
IS <インフィニット・ストラトス> 極道の道を進む

インフィニティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス>極道の道を進む

【Nコード】

N2198W

【作者名】

インフィニティー

【あらすじ】

一夏が極道に入ってます
原作キャラの扱いが酷い……………
気をつけてください

分かっていると思いますが極道≠極悪非道ですので性格が捻じ曲がって居たりします

十分お気をつけください

IN極道（前書き）

主人公と一夏がすごい強いです

原作キャラの扱いが酷かったり

なにしろ極道なので気をつけてください

IN極道

極道の中の極道Mrヤ・ク・ザ

日本全域を束ね今では世界にも進出している有名な組があるその名前は『海馬組』日本に支店は470とある
だが問題はそこではない、海馬組は設立してからまだ10年と経っていないのだこの出来事は日本を震撼させた
その組長は別名『竜巻の豪』と呼ばれている海馬豪だった
豪は日本中の組をすべて叩き潰し傘下に置いた

ここでなぜ一夏がここにいるかそれは……

一夏Side

第一回モンド・グロツソが終わり千冬姉が優勝した
そこまでは嬉しかったし誇りに思った
それからだ、世間が俺『織斑一夏』ではなくブリュンヒルデの弟としか見なくなったのは
どこに行っても千冬様のサインくださいなどの声ばかり
結局俺のことは誰も見てくれなかった

そして第二回のモンド・グロツソで俺は誘拐された
おそらく俺の姉を優勝させないためだろう、もうどうでも良かった。
誘拐するならさっさと殺してくれてかまわない、それぐらい俺は病んでいた

自殺も何回もしようと思った。リストカットもしたでも勇気が無かった

勇気が無いなら殺してもらえばいいと思い誘拐した黒服の奴等や近くにいたIS乗りにも反抗しまくった
そしたら案の定奴等は俺に銃口を向けた

目を閉じた瞬間『ドン』と言う音がした

が俺は死んでいなかった

そこには血を吐いて倒れている黒服の奴等と見るからに極道だなと思う人たちがいた

俺は驚いた、少し離れたところでISと戦っている人がいた

それが『海馬豪』だった

あの方はISを使わずにISに勝った

そして俺に近づき手を伸ばされた

「俺と一緒にこい、一夏、俺の息子にしてやる」

俺は手を取った

嬉しかった、俺の嫌いな織斑と言う苗字を使わないで一夏と呼んでくれたこと

織斑千冬の弟ではなく織斑一夏という一人の人間として認めてくれたこと

なによりその伸ばされた手

「よろしく、俺は一夏」

これが一夏と海馬豪がはじめて合った瞬間

IN極道（後書き）

感想など待っております。>B()>B<

人物紹介

主人公

海馬 龍夜

身長175cm

体重 不明

年齢 16

極道の中の極道の一家に生まれた
小さい頃から喧嘩を教え込まれ現在海馬豪の次に強い

白髪、イメージキャラクターはアイシールド21の蛭魔

他人が嫌い

一夏と家族以外は信用して無い

ISは乗れるが嫌い、というよりもISが龍夜の反応速度について
いけず足でまといになる

海馬 一夏

身長175

体重 不明

年齢 16

もともとは苗字が織斑だったが豪に引き取られ現在は養子になっている

他人が嫌い

龍夜と家族以外は信用して無い

ISは乗れるが嫌い、というよりもISが一夏の反応速度についていけず足でまといになる

2人は身長などはそっくりだが顔や髪の色が違う

海馬 豪

龍夜の親にして一夏の義理の親

一夏も自分の息子のように可愛がる

ISを素手で倒せる最強の人

現在は喧嘩はしなく、奥さんとラブラブ中

イメージキャラクターはone peaceの白ひげ

海馬 夏樹

豪の奥さん

キレると世界一怖い

いつも豪と一緒にラブラブしている

海馬 彩花

龍夜の将来の妻

超美人

BBQがすき

頭がすごくいい

本気になればISのコアも作れる

海馬 梨乃

一夏の将来の妻

超可愛い

頭がすごくいい

趣味は庭の手入れ

中村 仁

龍夜と一夏の一番信頼している付き人
昔、豪に助けられた経験が在る
仁と呼ばれている

霧島 敦

龍夜と一夏の付き人
喧嘩っ早いが結構強い

宴会&重大発表

「どうだ一夏？俺の家になはれたか？」

「ああ、ありがとな。あんな豪華な部屋準備してもらって」

豪華な部屋とは親父が一夏のために用意した純和風25畳の部屋である

もちろん龍夜も同じような部屋も持っている

極道の家というのはだいたい金持ちだ

まあ闇商売やってても警視總監に金を大量に渡してあるから全然問題ない

「そういえば、もうすぐ親父が宴会するとか行ってたからいこうぜ。」

「わかった」

一夏と龍夜は宴会場（100畳）に向かって歩き出した

「「「やってるか~~~~~」」」

龍夜と一夏が叫ぶと「おおー」という景気が良い返事が帰って来た

「若、のんでくださいえ」

「「「あいよ」」」

俺たちは一気に日本酒『男一本』を飲み干した

ちなみに海馬家では飲酒、タバコは15歳からになっており別に飲んでも平気らしい

『龍~~~~』

親父に呼ばれている、親父は酒が入ると龍夜を龍と呼び一夏を一と呼ぶ~~~~らしい

『お前らをIS学園に入れることにした』

~~~~~ええー??

「IS学園ってあのIS学園に?」

『そつだ』あの『IS学園だ』

Side 龍夜

最悪だ~~~~親父は嘘をつく人ではない、酔っ払っている時で

もだ

そもそも何故だ？高校にいかないからか？それともほかに理由が？

しかもIS学園って女子しかいないところだ

それに俺は他人が嫌いだ

ISには乗れるが嫌いだ、あの兵器はこの世界を女尊男卑に変えや  
がった

もし目の前に篠ノ野束がいたら殺しているかもしれない

後は邪魔者を消せば良いだけだしいいか

まあ親父の命令だししかたねえか……

って同じこと一夏思ってたそうだな

S i d e o u t

S i d e 一夏

嘘だろ……なんでIS学園なんかに行かなきゃダメなんだよ

でもまあ親父は嘘をつく人でもないし冗談を言う人でもない

ってことは……行かなきゃ行けないのか……



ちよつとまで、IS学園つて女しか居ないところだよな

それに俺は他人が嫌いだ

ISには一応乗れるが好きではない、あれは今まで出来てきた男尊女卑の世界を一瞬で女尊男卑に変えやがった

開発者の篠ノ野束が目の前にいたら殺すかもな・・・

後は邪魔するやつがいたら殺すだけだしな

まあ親父のことだからなにかあるんだろう

つて龍夜も同じこと思ってそうだな・・・

Side out

「親父、何でIS学園になつたんだ？」

『やっぱりお前ら似てるな〜ヒック ああそうだったなIS学園で  
ある理由はその学園長がな俺の昔の悪友なんだよ。あんまり強く  
は無かったが、頭が切れてな、まあいいやつだし、それに・・・』

それになんなんだ親父！すごい気になるじゃん。

『お前らは校内での自由を約束されている、全然問題なかるつ』

それ先に聞きたかったぜ、親父。。。。

「まあ、少しは授業に出なさいよ。」

2人そろって分かったと言ってまた酒を飲むのを再開し

飲み比べ対決や食べ比べ対決などくだらない遊びをやって

いつの間にか俺たちの意識は夢に入ってしまった

**宴会&重大発表(後書き)**

感想、ご意見、よろしくお願ひします。 > B ( ) B <

出発 IS学園校門前（前書き）

こんかいは龍夜視点で書いて見ました  
ぜひ見てってください

## 出発 IS学園校門前

あんまり嬉しく無い朝が来た、今日はIS学園に入学する日だ

そんなことを思ってたら急に気持ち悪くなってきた・・・

隣を見ると一夏も頭を押さえて倒れている きっと二日酔いの所為だろう

ってなんだか俺も頭痛くなってきた

「おはよう一夏」

「おはよう龍夜」

俺たちは息を大きく吸い込み

「頭痛てーーーーー」

もうすでにハモることは予想済みだ

あんなに昨日勝負しなければ良かった・・・どれくらい飲んだんだっけな？確か俺と一夏で酒樽一個飲んじまったしな。。確か酒樽は一升瓶40本分はいるから20本。。

やっちまったな、どうにて頭が痛いわけだ あれだけ飲んで平気なほうが可笑的い

それから10分後近くに居るのに大声で「若ー」と呼ぶ声があった  
二日酔いで機嫌が悪い俺と一夏は俺たちを呼んだ海道というやつに  
思いっきり制裁を下した

「じゃあ行ってらっしゃい、あなた」

「気をつけてね」

彩花と梨乃と約「100人の護衛に見送られ俺たちはフェラーリF  
50に乗り込んだ

ちなみにF50は俺の車だ

「若、いつてらっしゃいませ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

すさまじい音量の声とともに俺たちはIS学園に向かって行った

〳〳車内〳〳

「一夏、これ」

俺は一夏にカードを投げた、そのカードには【IS学園において一切の自由を約束する】と書いてあった

「サンキュー」

それから無言だった、今俺と一夏は学園でどうするかを考えていた  
授業はサボりたい、でもサボったら彩花になんていわれるか分かったもんじゃない

そんな思考が渦巻いていた

時は過ぎここはIS学園校門前

そもそもISとは何なのか簡単に説明しておこう

ISとはインフィニット・ストラトスの略でもともとは宇宙空間での作業を目的としたマルチ・フォームスーツだ

篠ノ野束が起こしたとされる白騎士事件で有名になった

だが今は競技用と皮をかぶり兵器として活躍している

「一夏、ここから一直線だな。」

「ああ」

「やることは一つ！」

俺はアクセルをめいっぱい踏み込んだ

ブウォオオンと言う音とともに一台のフェラーリF50が校舎に向  
かっていった



出発 IS学園校門前（後書き）

短くてすみません

また今日中に登校できるように頑張ります

感想、ご意見、お待ちしております

## 元の姉（前書き）

一夏と龍夜の心は一緒だと思ってください

つまり、同じようなことを考えて居ます

第4話スタートです

## 元の姉

一夏と俺はフェラーリでIS学園敷地の中で本校舎に向かって爆走していた

「一夏、ここ結構広くね？」

「まあ親父の家位じゃねえか」

おっと、そうだったな。IS学園はかなり広い、だか俺の親父の家と同じくらいだ。

つてすげえな、ハイテクだ。ゴミ箱が勝手に動いて掃除してる

そんなゴミ箱を一瞬で抜き去り校舎に向かった

~~~~~Side千冬~~~~~

私は今教室に居る、SHR中だ。だかさつきから車のエンジン音が五月蠅い、どこだ？と思っっていると

「先生、あっちから赤い車がかなりの速さでこっちに向かって居ま

す

「なに？」

私は驚いた、IS学園はもちろん学園の役割を果たしており高校生しか居ない

たとえ教師だったとしても、SHR中に来る先生など居ないし、あんな赤い車見たことが無い

じゃあなんなんだ？と思っていると車に乗ったまま用務員の轡木さんと話しているのが見えた

車のドアが開いた、そこに居たのは第二回モンド・グロツソの時から行方不明な私の弟、一夏だった

大声で叫ぶよりも先に足が動いた、廊下を全力疾走で走り階段をジャンプして外に出た

そこに居たのは紛れも無く私の弟、一夏だった

「一夏！今までどこへ行ってた！私がどれだけ心配したか分から

んのか!!」

私は怒鳴った、きつと涙も出ているだろう。それだけ会えたことが嬉しかった

また一緒に暮らせると思った、また一緒に飯を食えると思った、この感情は嬉しい以外の何者でもない

だが一夏からかえってきた言葉は

「なんで俺の名前知ってるの? 場合によっては殺すよ?」

~~~~~Side out~~~~~

俺と一夏は車から降りた、するとすぐに向こうから人影が見えた

人影はすぐに一夏の目の前まで行き、怒鳴り散らした

「一夏、今までどこへ行っていた! 私がどれだけ心配したかわからんのか!!」

俺たちは目をあわせる

すると一夏が

「なんで俺の名前知ってるの? 場合によっては殺すよ?」

俺は後ろから、一夏は前から、首元にナイフをつき立てた

「っ！、一夏私だ、お前の姉の織斑千冬だ！」

織斑？織斑千冬ってどこかできいたような・・・まあいいか

まあ、今俺は一夏の考えてることが分かる

長い間一緒に居れば分かるよな

おそらく、千冬？ああ！俺の元身内か。とても思っているんだろう

そしたら案の定、一夏は口を開き

「俺に姉など居ない、居るのは龍夜と親父と海馬家の人たちだ」

冷たく言い放った。俺もおそらく同じ立場だったらそう言うと思う

俺と一夏はアイコンタクトをし、ナイフを織斑千冬の首から離すと学園に向かっていった

「ああ、忘れてた、俺ここの生徒になるから」

後ろを向いて言い忘れてたことを言いましたまた歩いて行った

~~~~~Side千冬~~~~~

私は絶望した

いきなり我が弟とその友人にナイフを突きつけられた

しかも殺すよとも言われた

怖かった。目はあるが他人を見てない、眼中に入っ
て居ないような目だった

私は何も言い返せないまま、2人は歩き出した

そんな二人を私は目で追うことしか出来なかった

元の姉（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。m () m

IS学園(前書き)

今回は一夏視点が多いかもです

あれから俺と一夏は校内を探索した

あ、そういえばどこのクラスに行けば良いのか聞いてなかったな

兎も角、一番ここから近い？ー？へ行きますか

教室をすこし覗いたら自己紹介をして居た

「じゃあ一夏、【お】が終わったらいこうぜ」

「おう」

「じゃあ次は「か」から始まる人？」

「失礼」

ドアが開いて一気にこちらへ注がれる目線、まあ慣れてるからなんてことはないけどな

「誰……ですか？」

背の小さくて童顔の人が話しかけてきた

「先生いる？」

その瞬間大笑いが起こった、それに童顔の子は怒っているみたいだ

「私が先生です！！生徒と間違えないでください！！」

そうなんだ、てかこんな童顔の人初めて見た

おっと自己紹介を忘れていた

「このクラスに入る海馬龍夜だ、それでこっちが「一夏、海馬一夏だ」

「一夏！一夏なのか？「五月蠅い」っ！」

端の方の女子生徒が一夏の名前を知っているみたいだ。まあほって置いて大丈夫だろうと判断した俺は自己紹介を続けた

「一つ言っておく、俺はこの女尊男卑の世界が嫌いだ。後俺は他人が嫌いだから話しかけるなよ。」

続いて一夏も「俺もだ、他人が嫌いだ、話しかけるな」

教室の空気がある程度冷めたところで童顔が「じっじゃあ、質問があればいいですか？」

「1つだけな」「俺も1つだ」

合計二つか、どう質問してくるんだろうかねえ

「ISに乗れるの？」

ISが乗れなければここに入れねえだろうが、頭超悪いな

「ISには乗れるが、俺たちはISには乗らない」

「二人答えたから、質問終わりね。もう話しかけないで」

また空気が冷めたような気がするな

ところどころで「素敵」とか「かつこいい」とか「キャー」とか言葉が飛び交っているが、お前らに褒められたって嬉しくねえんだよ

ちょうど二つあいてる席が在ったのでそこに座る、そして一夏と話し始めた

クラス全員の自己紹介が終わったところで担任らしき人物が来た

それはさっき俺たちがナイフを突き立ててやった奴だった

あいつは俺たちの顔を見て一瞬おびえたように感じたがすぐに真顔に戻り自分の自己紹介を始めた

「クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな、山田君」

どうやらあの童顔教師は山田と言っらしい

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を1年で使い物にするのが仕事だ。」

その瞬間、冷めていた教室が一気に暖かくなり「キヤー」と言う声
が大量に耳に入った

「五月蠅いんだよ、静かにしろ」

おっと声に出ていたようだ、それにまたハモった

また教室が30度から0度にまで気温が下がった

~~~~~Side一夏~~~~~

担任はあの織斑か、俺たちの方を見て怯えた顔をして

そこまで弱い奴だったとは、世界最強が聞いて呆れるな

期待していた俺が馬鹿だったな

今頃龍夜も同じ事考えてそうだ

~~~~~Side out~~~~~

今、何か繋がったような気がする

一夏も同じような事でも考えていたのか？

考えているうちにSHRが終わっていた

「あの子だって、突然IS学園に入ってきたISを使える男子って」

「でも他人が嫌いなんだって」

「話しかけてみようかな」

など五月蠅い声がそこら中から聞こえた

そんななか一夏に

「ちょっといいか」

~~~~~Side一夏~~~~~

「ちょっといいか」と見ず知らずの女に話しかけられた

「話しかけるな」と俺は言った、だが女は俺の手を引っ張ってどこかへ連れて行くこうとするため俺は、迷わずナイフを出し首元に突き当てた

「っ！一夏、私を忘れたのか！！」

こいつも俺の名前を知っているらしいだが俺の記憶にはこんな女存在しない

「お前誰だよ、用が無いなら消えて」

「箒だ、篠ノ野箒！忘れたのか！昔一緒に道場で剣道やってたではないか！！」

箒？誰だよ、それに昔っていつか知らねえし

「とにかく、来てもらう！」

と俺は連れて行かれた、その後ろに龍夜が画用紙らしきものに【何も話さないほうが面白くね】と書かれていたので俺はそれをする事にした

俺は屋上に連れて行かれた、俺は「急に思い出した」とか言ったらどうなるのか気になって遊んでみた

「思い出したぞ、箒だな。昔剣道一緒にやったな」

「お、思い出したのだな！そうかそうか」

案の定引っかかりこいつバカだなと思いつつも演技を続けた

だからそれからは俺に何かを言おうとするも止め、言おうとするも止めの繰り返しになっていい加減うざくなってきたので

「嘘だよ、君の事なんか一切思い出してない。もう関わらないでくれないかな」

と言い屋上から出て行った

後ろですすり泣く声が聞こえたが親父の教えで「女は泣いて男に漬け込む。注意しろよ」と言われたのを思い出しスルーして教室へ向かって行った

ちなみに本当は3組だったのが出口から一番近い理由で1組になった龍夜と一夏はクラス替えの先生の苦勞を知らない



## IS学園（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております

謝罪、はじめ（前書き）

今回は極道の事を結構書いてみました！

ドス〓刃物

長ドス〓長い刃物

もます〓トラブルを起こす事

チャカ〓拳銃

## 謝罪、けじめ

放課後、俺達は親父に呼び出された

少しお怒り気味のようだ

「十蔵から聞いたぞ、お前ら教師にドスむけたらしいな。あれはやめる。弱い人間かも知れないがお前らはIS学園の生徒だ。生徒で居る以上教える立場の人間には敬意を払え、それだけは約束だ、あと、もますなよ。」

それだけ言つと部屋から出て行つた

確かに今考えればやりすぎたと思う

「一夏、俺達やりすぎたな・・・これからどうする?」

「俺達は次のトップの候補だからな、指落とすわけにも行かないし・・・俺達の金すべてやるか?」

「いいアイデアかもしれないな」

俺達が今までためてきた金、500億は越すだろう。だが俺達はちとやりすぎた

けじめつけるのには全額じゃないとな。

「取り合図、護身用としてドスとチャカだけ持っておこう。だかよ

ほどの事が無いかぎり向けてはダメだ、まあ後は他人に関心をもてるといいな」

「そうだな、俺もけじめはつけたいし、まあ俺達を見下す奴らには多少の斬り込みはするかもしれないがそれ以外は普通に答えるさ。今日の事も織斑には謝っておく。」

約束は決まった。明日からは絶対守らないとな

翌朝………

「ドスに向けてすまなかった、お詫びといっっちゃあなんだが気持ちだ、受け取ってくれ」

「俺も千冬さんには迷惑かけた、本当にすまねえ」

~~~~~Side 千冬~~~~~

私は海馬二人に呼び出された、なにをするのかは分からないがとりあえず二人について行った

IS学園には小規模な森がある。私はそこに連れて行かれた。恐喝でもするのかなと思ったが、彼らの口から出た言葉は正反対のものだ

った

「ドスを向けてすまなかった、お詫びといっちゃあなんだが俺達のために金なんだ、受け取ってくれ」

「俺も千冬さんには迷惑かけた、本当にすまねえ」

一瞬何が起きたのか分からなかったが彼らは私に昨日のことで頭を下げていた

なにが彼らをこうさせたのか分からないが、彼らは「ケジメ」らしい

さらに莫大な金ももらった、私はいらないうつたが彼らは「学園の金にしてもいい、受け取ってくれ」と言っていた

そう言う理由で私は金を受け取った、だがアタツシユケースが山のように積んで在るので彼らの車で移動する事にした

金の事についてはめんどくさかったので聞かなかった

「まったく驚かされる、お前達の行動には。」

「俺達の勝手だ、気にするな」

「ISでも買え」

相変わらず口は悪いが心は悪い奴では無いようだ

「ありがとう」

彼らは何かを言っていたが聞き取れずそれは車のエンジン音にかき消されていった・・・

~~~~~Side out~~~~~

時は過ぎ・・・午後3時

授業は出て居ない、今日は家で反省会的なを一夏とやっている

「そう言えば篠ノ之には謝らなくていいのか？」

「めんどくさい。それに織斑にすべて金やっちまったしな」

まあ、俺も嫌いだな、人物ではなくて篠ノ之って言う苗字が嫌いだ。

あの女・篠ノ之束、この世界を女尊男卑の世界へと変えやがった張本人、昔から変わって居なかった【男が女を守る】と言うことをぶっ壊しやがった

今では町を歩くと男がパシリになっているのを見るのも珍しくない、裁判でも大抵女が優先で勝つ

そんな世界が嫌いだ、これから男がなめられなくなるには男だけのパワードスーツをつくるしか無いと思ひ俺と一夏と仲間達で開発中だ結構進んでいるが、もともとの身体能力が高い人間で無いと使えないんだ。海馬組だ大体全員使えるだろうが・・・

兎も角、今は完成を急いでいる。

篠ノ之箒が篠ノ之束の関係者だって事はある程度分かっている、おそらく一夏もだろう。だから話したくないのかもしれない

そんな事を思っていると急に携帯が鳴り出した

【私だ、織斑だ。どうやら政府がISの乗れる男子の事をかぎついたらしい。至急戻ってきてくれるか？】

俺は【了解】とだけ伝えると

『仁！敦！』

俺は付き人の中村 仁と霧島 敦を呼び出した

『IS学園に行く、ついてこい』

とだけいうと『へい』と言う言葉とともに長ドスとドスをもってきた  
必要ないと思うが・・・保険のためあいつらに持たせた

親父には一夏が電話で行つてくると言い、俺達今回は4人なので、愛車のフェラーリには乗れず仕方が無いので警察からもらった覆面のベンツに乗り  
サイレンを鳴らしてIS学園に向かった

IS学園に着き理事長室に入ると用務員の爺さんと、政府の役人に織斑がいた

「む？来たか。早かったな」

「まあベントでサイレン鳴らしてきたからなあ、スイスイいけたよ、信号も」

信号無視をしてもサツの車なのでつかまらない、なんて便利な車だ

【お前らがISに乗れる男か、弱そうだが本当にのれるのか？】

おいおい止めた方が良くぞ、敦は気が短けえからよ

「てめえ、若に向かってなんて口きいてやがる！」

とこうなる、「敦、いいよ。やめとけ」と言うて戻るがまだ鞘にドスをしまっていない

「私に刃物を向けるのか貴様！私を誰だと思っている？！」

どうやらご立腹のようだ、だが俺はこんな奴をしらない。TVも毎日チェックしているがこんな奴は始めて見た

「名も知れて無い奴に興味は無い」

と俺が言おうとした事一夏が言ってしまった



【もう私は帰る！こんなやつとの空気も吸いたくない！明日には退学になると思え！】

見事な捨て台詞だな、と思いながら俺達はその場を後にした

翌朝、ニュースで流れていたのは【IS学園、男子生徒退学！】のニュースではなく【汚職政治家、政府の金横領！逮捕】のニュースだった

## 謝罪、けじめ（後書き）

皆さん感想ありがとうございます！  
今回はケジメがポイントでした！  
感想などもどんどんお願いします！

すいません。もう一度作り直します

作者には龍夜と一夏が二人の主人公だと荷が重過ぎました・・・

これから一夏だけのリメイクを作りたいと思います

龍夜は消します。。。。。。。。

二人は行動同じだ。。。なんだかこっちも変な気分なので一度リセットします

皆さんからの指摘を踏まえもう一度作り直したいと思ってます

新しい設定なども募集です。。。

その方が読みやすいと思いますし。。。みなさんはどうですか??

設定、指摘、絶対にくして などの事を感想に書いてください

一風違ったものでもいいですがISと極道は必ずいれてほしいです

リメイクするのでなにとぞよろしくお願いします

今までIS 極道の道を進むを見てくださりありがとうございます

設定などが完成したらすぐに書き始めますのでよろしく願います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2198w/>

---

IS <インフィニット・ストラトス> 極道の道を進む

2011年8月31日08時53分発行